

裏方稼業
八板賢二郎

私は1966年に国立劇場の職に就いて映像担当を希望していたのですが、音響係に配属され、好きで就いたわけでもなく、歌舞伎など観たこともない人間ですが、生活を維持するための仕事、つまり稼業として音響の仕事が続けました。石の上にも三年という辛抱期間です。

最初にやらされたのはコオロギの声を出す擬音笛の練習、次はウグイス笛、そして本番では笛を吹いて役者と演技をさせられました。そこで悟ったのは、与えられた仕事を好きになればいいのだということです。

上司は某劇団から来た人で、当初「俺達は創造者だ」「芸術院会員になるくらいの気概を持って」と毎日のように発破をかけられていました。また、媚びて仕事をするなども言われました。上司は発想が豊かで、それを実現する仕事をさせられて育ち、創造力を養うことができたのです。

私は、音の仕事をアカデミックに語らないことにしています。また、いろいろな考えの人が居てよしいのではないかと思うと同時に、自慢話はしないことにしています。また、俳優と同じでお呼びがなければ仕事は無い「水商売」なのだと思っています。そのようなことを考えながら、劇場の仕事以外に国内外の様々な仕事も猛烈にやっていた時代があります。

その時代の仕事の取り組みは、プロとしてギャラとクレジットには特に厳しくしていました。その頃から、歌舞伎作者（狂言作者）の河竹黙阿弥かわたけもくあみが弟子たちに言っていた「三親切さんしんせつ」を座右の銘にしました。これは「観客に親切」「役者に親切」「座元（劇場経営者）に親切」の3つで、観客に楽しかったと、役者にはこの作品に出て良かったと、座元にはこの作品を上演して良かったと思われる芝居を書けという意味です。

私がやってきたのはアートではなくエンターテインメントと考えているので「舞台芸術」ではなく「舞台芸能」と呼ぶのにこだわっています。

また、能の演劇論である世阿弥よあやの「風姿花伝ふうしかでん」を私の裏方人生論に当てはめてやってきました。そのため非日

常の世界を演じているのだから本物“らしく”見せることに精魂込めていたし、自分を「音の詐欺師」または「音のマジシャン」としていました。

ちなみに、現在は国立劇場の自主公演すべてのパンフレットに技術スタッフがクレジットされています。

以下は、私が2009年に劇場を退職するときに執筆した著書「音で観る歌舞伎“舞台裏からのぞいた伝統芸能”」（新評論刊）の巻末に書いたものです。

+++++

私がこの世界に入ったときに先輩から言われたのは「親の死に目に会えないぞ」の一言であった。現実、その通りになったのだが、その言葉は今でも脳裏に焼き付いている。陰で仕事をする裏方であっても、大事な役を与えられれば役者と同じで、親が危篤でも駆けつけることはできず、千穂楽まで休まずに通さなければならないのが裏方稼業なのだ。

実は、そのように大役を与えられなければ一人前とは言えない。私が23歳の駆け出しのころ、疲労が理由で足首が腫れ上がってしまって歩くことができなくなったとき、上司がしたことといえば現場に医者を呼んでくれただけだった。「裏方は怪我と弁当は自分もち」と言われ、怪我をしないようにするのも自らの責任である。

当たり前のことではあるが、自分の健康管理ができてやっと一人前の裏方と言えるのだ。

私たちは舞台を「板」とも呼んでいて、幕を開けたときに役者が所定の位置に配置することを「板付き（いたづき）」と言っている。役者も裏方も、この板の上に乗ったときから真剣勝負がはじまり、身分の上も下も、裏も表もなくなる。全員が一つの目標に向かって進撃するわけだ。裏方たちは、役者の要望を2倍にも3倍にも膨らませて観客が喜ぶ舞台を製作していくことになる。

道具調べや舞台稽古だけでなく、公演の期間中も各部署に「駄目出し」と言われる不都合な箇所の指摘がある。

このとき、どんなに難しい注文も引き受けて、知恵を絞って翌日までには結論を出さなければならない。だから、大道具も照明も音響も、みんなクリエイターなのである。できることはすぐにやる、できそうなことであれば逃げないで挑戦をするというのが裏方気質である。

ただ、そうして考えた案も「それ、いらない」という演出家の一声で消えてしまうこともある。

裏方たちは、役職名の「部長」、「課長」などと呼ぶことは絶対にしない。年齢や地位の上下を意識しないで仕事をするために、舞台の裏方たちは「ちゃん」「やん」を付けて呼ぶことになっている。辻村さんは「ツジやん」、斎藤さんは大勢いるし呼びにくいので、下の名前が「譲次」ならば「ジョウちゃん」、私は八板(やいた)なので「イタちゃん」と呼ばれていた。このように呼ばれるようになると、裏方の仲間入りができたということである。

この仕事をはじめたとき、あまりの辛さに逃げ出そうと考えたことがある。しかし、みんなで同じ釜の飯を食っている雰囲気と、千穂楽を迎えたときの達成感が何とも言えなくなった。また、最終幕の幕切れに聞こえてくる満場の拍手喝采の音に勇気づけられ、終演後の観客席の温もりに人を喜ばせる仕事の素晴らしさを覚え、この仕事から去ることができなくなっていた。

思い起こすと、24～25歳ぐらいのときに習得した考え方が一生続くようである。そして30歳までに素晴らしい人と出会っていかに教えを受けるかが大切で、それ以後は、それまで得たものをいかに成熟させるかであった。

《中略》

ここで私の新人教育法を述べておく。

私もそうであったが、誰でも初めはズブの素人であって、生まれたときからプロだったような顔をしている人も、若いときは先輩から怒鳴られていたのである。どのような職場でも、新人は周囲の人たちの名前を覚えることや、トイレがどこにあるかなど、職場の組織と構造を覚えるだけでパニックとなる。

そのような状態なのに、難しい歌舞伎の外題(げだい＝正式な題名)の読み方など教えても無駄である。私は、新人に何も教えずに舞台の袖に同席させて、大道具や照

明の作業の邪魔をすることなく怪我をしないでいられる訓練をさせることにしている。これこそが舞台で仕事をするときの基本であって、知識だけでは仕事にならないゆえんである。

また若手には、簡単な作業であってよいから責任をもたせることが上達させる秘訣と思っている。新人女性に初めて生音(なまおと＝擬音笛などを吹くこと)をやらせたときのことであるが、初日の朝は顔面蒼白で出勤してきた。笑顔が消え、持参した弁当も食べずに黙りこくっている。出番が来て無事に終わって控室に戻ってきたときにようやく笑顔になって、公衆電話に走っていった。母親に無事にできたことを報告に行ったらしく、戻ってきてから美味そうに弁当を食べていた。

これほどまでに責任を感じ、緊張して初仕事に挑戦してくれたことに頭が下がる。そして、この新人たちが25～6歳になって、仕事のうえで壁にぶち当たって口惜し涙を流す場面を何度も見てきた。このときからプロ根性が備わり、どんどん成長していくのである。

私たちは、周りにいるさまざまな人たちから心に残る言葉をかけられながら成長してきた。そのなかでも、以下のような言葉は私の人生訓となっている。

- ・他人を立てることで、自分も立つようになる
- ・相手が得をする嘘はいいが、自分が得をする嘘についてはいけない
- ・失敗して謝るのは早いほうがよい。遅くなるほどたくさん叱られる
- ・芝居は知識だけで作れない。知恵で面白くする

裏方人生は、柀(き＝歌舞伎などで使用する拍子木)の名人竹柴蟹助の残した言葉『随分辛い思いもしたが、また好い気持なことも沢山ある』に尽きる。そして何よりも、人を幸せにし、人のために役立っている仕事をしていること、それが裏方の生きがいである。

+++++

私の仕事術は、余計なことはせず経費を少なくし、短時間で仕上げ、機器は性能にこだわらずシンプルにして、高額な報酬をいただくことです。

【やいた けんじろう】